

第1回北海道150年道民検討会議 議事概要（事務局作成）

日時：平成28年6月10日（金）10：00～11：20

場所：ホテルポールスター札幌 2F コンチェルト

【出席者】

<委員>

山口委員長、石森委員、伊藤委員、生方委員、落合委員、加藤委員、菊谷委員、小磯委員、佐々木委員、鈴木委員、森専務理事【高橋賢友委員代理】、高橋はるみ委員、高向委員、竹田委員、谷本常務理事【棚野委員代理】、飛田委員、三好委員 計17名

<事務局>

（北海道経済連合会）菅原理事・事務局長

（北海道商工会議所連合会）守山事務局長

（北海道）山谷副知事、窪田総合政策部長、平野政策局長、岩崎北海道150年事業準備室長

【議事概要】※発言順

- ・今を生きる私たち道民が、北海道の姿というものを改めて見つめ直し、歴史や芸術文化など、先人から受け継いだ財産を次の世代に継承するとともに、道内各地域が持つ多様な魅力を、広く道内外、世界にも発信する絶好の機会と捉え、記念事業を行いたい。
- ・北海道の未来を見据えつつ、北海道の可能性を見つめ直し、新たな価値を創り出すとともに、その価値を多くの道民の皆様方と共有できるような取組にしたい。
- ・北海道博物館は、2018年に松浦武四郎展（特別展）を既に企画している。
- ・百年記念事業のフォローアップが必要。貴重な資源であり、受け継いでいく必要がある。
- ・2020年に白老町に整備予定の民族共生象徴空間と北海道開拓の村などは、両面で北海道の50年先を見据えることが大切。
- ・「開拓の対象としての北海道」は既に終わっている。自分達の子孫や後輩たちが、新しい北海道を自分達の手で創っていく場を提供するのが、北海道150年（事業）の使命。
- ・世界規模の北海道ファンをつくるのが非常に大事であることから、北海道民の概念を変えて、インターネットを活用した「バーチャル道民」を形成してはどうか。イベントや道産品などについて、バーチャル道民に対して常に情報発信し気づいてもらうことで、また北海道に来てもらい、買ってもらうことができる。
- ・道民が当たり前と感じている食や観光の資源をうまく情報発信できていない、つまりブランディングができていないと感じる。
- ・企業の持つ様々な媒体と連携し、PRすることによって、道民一人一人の認識が高まり、情報発信できるようになるのではないかな。
- ・道の新しいキャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道」はとてもよい。パッと映像が浮かんでくるような気がする。
- ・アイヌの紋様はデザインがすごく綺麗。空港などで、ホノルルのように、アイヌの紋様をデザインしたシャツなどで観光客をお迎えしてはどうか。「イランカラプテ」のお迎えの気持ちで関係者が皆関わることが大事。アイヌの素晴らしさを広めることで、観光客の発掘にも繋がるのではないかな。
- ・貸切バスやタクシーなどにステッカーを貼るなどの目に触れやすい小さなPR活動や、インターネットを活用して双方向で盛が上がるなど、民間もしっかり応援をすることで素晴らしい記念事業になるのではないかな。
- ・近現代の歴史において、アイヌと和人の関係には光と影があったが、ともに今日の北海道の発展に礎を創ってきたと思う。
- ・全ての人に基本的人権がある。お互いに理解し認め合う社会、共生の社会を創っていけるよう皆さんにもお願いしたい。
- ・作文募集（対象：15歳以上25歳以下の道民）について、頑張ろうという思いを持っている市町村の若手職員にも是非声をかけていただきたい。
- ・名前が知られていないまちにとっては、北海道は有り難いブランドであり、150年もひとつのツール。
- ・インターネットを活用した情報発信の取組をして頂ければ、（野菜の販売など）我々も頑張り甲斐がある。

- ・大切なのは、事業の理念であり、それが北海道民全体で共有されながら進めていくこと。
- ・150年という時間軸の中で、北海道の伝統をしっかりと再認識し、その誇りと責任を持って次世代につないでいくことを軸に据える必要がある。
- ・誇るべき北海道の地域づくり、政策づくりの財産には、先人の努力や創意工夫があり、それらの政策の系譜のようなものをこの機会にしっかりと整理、検証して、次の世代につないでいくことが大事。そういう政策の検証によって、自力で地域づくりを目指していく、それに繋がる道民自身の意識醸成が生まれてくるのではないか。
- ・次の世代につなげるのは、歴史や芸術文化だけではなく、「産業」も加えた方がよいのではないか。
- ・道民の誰もが活用できる北海道150年のデータベースが欲しい。
- ・北海道の強みとして、環境にも関わる「森林」もテーマとして挙げられるのではないか。
- ・記念事業終了後に、関係性と意欲のある市町村に（事業を）移管することを検討してはどうか。事業の検討にあたって、継続することを前提とする視点がほしい。
- ・投資として海外メディアを招待し、アイヌ文化など北海道の素晴らしい資産や価値を世界に情報発信してはどうか。
- ・アイヌの素晴らしい舞踊や音楽を、イベントの中で用いるとともに、そのプログラムの訓練を重ねることで、2020年の国立競技場（東京オリンピック・パラリンピック）で披露することも夢ではないのではないか。
- ・東京の企業等の北海道を応援してくれるパートナーに北海道の魅力を伝え、地域と東京を繋ぐ役割を担い、これからも、北海道、特に地域のコンテンツを伝えていかなければならないと感じた。
- ・アイヌ文化について我々自身ももっと勉強し、今後のコンテンツと組み合わせる中で伝えていくことができたらと感じた。
- ・スポーツを通じたコミュニケーションによって、地域と密着しながら、地域と共生できるような活動に取り組んでいきたい。
- ・名前さえも読んでもらえない町村があるという現実がある。北海道150年を契機として、道民が北海道の歴史を振り返ったり見つめ直すよい機会だと思う。
- ・北海道は府県と比べると大変短い期間で農業が展開された。
- ・地域における農業の大切さ、食育の大切さをどのように広めていくのかというのが北海道150年以降の大きな問題になるだろう。
- ・150年は、先住民族の長い歴史からみるとすごく僅かな時間で、しかも通過点に過ぎない。
- ・北海道に渡ってきた人の大半は何らかの困難を抱えてやってきたのだと思うが、しがらみの無さが、ある意味で自由で多様な価値観を生み、お互いを認め合って、自然条件や経済的困窮の中で壁を乗り越えてきたと思わざるを得ない。ただ、そのような気風が、この150年の間に錆び付いているのであれば、もう一度改めて確認する必要がある。
- ・北海道にやってきて成功する人も挫折する人も、いろいろな人を包み込む大きな舞台としての北海道のあり方というものをこの機会に考えてみたい。
- ・各委員の発言を踏まえて、北海道全体の経済の発展につながっていくよう、知恵をこらしていきたい。
- ・150年のイベントを、先住民族のアイヌの方々が一緒に喜んでくださるように、特に配慮していただきたい。
- ・入植した人達の失敗や苦勞の歴史が忘れられないように、この機会に振り返りたい。自分のおじいさんがどのような苦勞をしたかということをお伝えしなければならない。
- ・北海道大学も、国策を負う部分はあるが、北海道にも還元していきたい。
- ・新たな学問を進め、特に近頃は産業界と一緒にそれを進めて行くことに邁進しており、そのことが北海道に寄与することになっているのではないかと思う。
- ・50年前に整備あるいは計画した開拓の村や百年記念塔については、一部危険な状態にあることなどから、今後の整備方針等について検討する必要がある。
- ・2020年に向けて白老町に整備されている民族共生象徴空間などとのコラボレーションなど、先を見越して事業を考えていかなければならない。
- ・今の子供たちが、「これからの50年を支えていこう」と思えるような、あるいは50年後「150年のときにはこうこうことをやったんだ」と思えるような、インパクトのあることをやりたい。
- ・コンテンツやビジュアルの世界、ITの世界も大変重要である。